
地方文書に見る清末モンゴル西部のカザフ人

井上 治

1. はじめに

筆者はこの8年ほど、モンゴル人やモンゴル系の人々と他民族との歴史的接触の痕跡やその継承の現況、現在の接触の現状、それらに対する当事者たちの認識のあり方に興味を持ち、ヨーロッパや東南アジアまで調査の足を伸ばしている。

個人的な大雑把なイメージでは、モンゴル人の西隣にはカザフ (Mo. Qasay; HMo. Kazah; Ka. Qazaq)¹⁾ 人が居住しており、両者の接点は、中国新疆ウイグル自治区北部やモンゴル国西部に存在し、これらの一部地域には両者が混住する所がある。前者の代表として新疆のアルタイ (Ch. 阿勒泰; Mo. Altai) 地区、後者はバヤンウルギー・アイマグ (HMo. Bayan-ölgii aimag, aimag は県級地方行政単位) が挙げられる。もっとも、この地域でカザフ人と接している人々の多くは、ドウルヴド (Mo. Dörbed; HMo. Dörvöd) をはじめとするオイラド (Mo. Oyirad) 諸族やオリアンハイ (Mo. Uriyangqai; HMo. Urianhai)、トゥヴァ (Tu. Tiva; HMo. Tyva) を名乗る人々であるので、厳密に言えば、筆者の言うモンゴル人やモンゴル系の人々には含められないかもしれない。その一方で、オイラド諸族とモンゴル国に住むオリアンハイ人はモンゴル系の言語を用いていることや、下の 4-5 に示す公文書では、「オリアンハイ」を「モンゴル」と称している事実もある。

筆者は、このような人々の居住地である新疆のイリ・カザフ自治州

1) カザフ語表記は基本的に [Sultan 2006] 所出のキリル文字表記カザフ語をラテン文字に転写した。なお、転写する言語の略号は次の通り。Mo. モンゴル文語のラテン文字転写、HMo. キリル文字表記モンゴル語のラテン文字転写、Ch. 漢語のピンイン表記、Tu. キリル文字表記トゥヴァ語のラテン文字転写、Ka. キリル文字表記カザフ語のラテン文字転写。

アルタイ地区アルタイ市とその近郊、モンゴル国のバヤンウルギー・アイマグのウルギー市とその近郊を2005年から断続的に訪問した。総じて、新疆での調査活動から興味深い民族関係の証言に触れることができた反面、行動に不自由が多かったため、研究は自然とモンゴル国西部に傾斜していった。上述の地域での現地調査を経て、筆者は、オイラド諸族やオリアンハイ人、トゥヴァ人、カザフ人たちの融和・対立関係、その背景にある相互認識や、国境を越えた同族に対する認識などに興味を深めてきた。そして、現地で見聞した事柄の歴史的前提として、当該地域が多民族共生空間となった過程や民族関係史に迫るため、モンゴル国西部諸アイマグ²⁾に由来する公文書を調査し、カザフ人と他民族との共生関係の歴史的様態を析出することとした。モンゴル国立中央公文書館に所蔵される清代のホヴド参贊大臣管下諸官衙の公文書に見えるカザフ人関連情報への接近を試みた。

このような試みの大きな障害として、筆者がカザフ語を十分に解しないため、カザフ語で書かれた史料や文献に接近できないことがある。この問題への対応を考えるため、モンゴル国立中央公文書館所蔵の公文書に通じた研究者に事前に問い合わせた結果、同館所蔵のホヴド参贊大臣管下諸官衙の公文書にモンゴル語やカザフ語で書かれたカザフ人に関する文書はきわめて少ないとのことであった。また、モンゴル・カザフ史の専門家がカザフ語で書いた专著³⁾は清代のカザフ人の歴史を詳しく説いていないとの情報も得ているものの、先行研究の内容を自ら吟味できない限界は深く自覚するところであるが、これをもって文書閲覧を断念するには及ばないとも考えた。調査の時間に制約があることを考慮に入れ、同館の清代ホヴド参贊大臣管下の諸フォンドを

2) バヤンウルギー、ゴビアルタイ、ザヴハン、ホヴドの諸アイマグ [Mongol Ulsyn Ündesnii Statistikiin Horoo 2011 : 66]。

3) たとえば、A.Sarayの*Revoluçiyadan burmğı qazaq xalqı*. (Ölgiy, 1991)、R. Şınayの*Moñğoliyadağr qazaq xalqı*. (Ulaanbaatar, 2007)、Ş. Jükeyの*XX ğasırdağr Moñğoliya qazaqtarı*. (Ulaanbaatar, 2008)、X. İslamの*Moñğoliya qazaqtarınıñ tarixı*. (Ölgiy, 1980) など、関連する研究があるようだが、これら研究のレビューも十分ではない。

優先して閲覽し、関係史・制度史・事件史には積極的に接近せず、あくまで地域における共生関係を反映した文書を発掘する方針を立てた。

清代のカザフ史に関しては、近年の野田や小沼の研究〔野田 2011；小沼 2014〕から学んだところが多くあった。前者はカザフ＝ハン国、ロシア帝国、清朝の多元的関係を考察し、後者は「中央アジア草原」が清朝の辺境と化す社会再編過程を扱っている。両者とも、当時のカザフ人たちの動静にホヴド地域が関係を持っていることは認識しており、別の共著ではカザフ側から清朝に送られたモンゴル語文書を含む興味深い文書史料を取り上げて研究している〔Noda & Onuma 2010〕。また小沼は「清末ホヴド地方における行政と移住：1838年のカザフ侵入事件とその影響」（平成26年6月14日東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成26年度第1回研究会）と題する報告を行い、1838年にカザフ人イジャグトなる者がホヴド側に侵入した事件をきっかけに清側の防衛が強化された一方で、カザフ人がホヴドへ流入する端緒ともなったことに着目している。しかしながら、両者ともモンゴル国所在の公文書を用いる状況には至っていない。

未だ関連の先行研究を広くレビューしていない状況にあるが、筆者は、筆者が興味を向けているような、モンゴル国所在の公文書を取り込んで、モンゴル西部地域におけるカザフ人と他民族との共生関係の態を解明しにくい条件、たとえば、公文書史料が十分に開拓されていない、あるいは厳密な実証的研究には耐えない程度の公文書しか残っていない状況があるのではないかと推測し、モンゴル国立中央公文書館所蔵の文書を調査し、その実際の結果を示しておくことも一定の学術的情報となるだろうと考えた。実際には、フヴスグル（Mo. Köbsügül; HMo. Hövsgöl）、オリアスタイ（Mo. Uliyasutai; HMo. Uliastai）、ホヴド城関連のフォンドを閲覽する時間がなかったので文書調査は不十分なままであるが、一連の調査研究の締めくくりとして、史料が比較的に残っている清の光緒年間を中心に、カザフ人と他民族の共生関係の

一端が記された文書から、その関係の歴史的様態を析出する。

2. 「モンゴルのカザフ人」

バヤンウルギー・アイマグでの様々な公式的見解を総合した『バヤンウルギー・アイマグ百科』[Sultan & Zulikafili 2010] では、1860年代から「モンゴルのカザフ人」という概念が出来上がったとしている。

現在のバヤンウルギー・アイマグを中心とするモンゴル西部地域に移入したのは、カザフ中ジュズのアバク・ケレイ (Ka. Abaq Kerey) 集団⁴⁾の一頭目であったジャンベク (1709-1792. Ka. Jänibek Berdäwletuli) に率いられた人々であった。[Sultan & Zulikafili 2010] では、ジャンベクは、ジャンテケイ (Ka. Jäntekey) 氏族の出身で、アブライがカザフ = ハン国を率いた時期の側近の将軍としてジュンガルとの戦いで活躍し、1760年代にカザフ中ジュズからケレイ部族を率いて現在の新疆ウイグル自治区アルタイ山脈南麓に移動してここに定着した人物とされており⁵⁾、さらに、やや伝説的要素を交えて、中国とモンゴルに暮らすケレイ部族のリーダー・伝説的将軍・賢い指導者と評価されている人物であるとする [Sultan & Zulikafili 2010 : 29, 230-231]。

アルタイ南麓移住後、アバク・ケレイ集団の人口と家畜が増加し、現新疆ウイグル自治区のアルタイ、タルバガタイ、イリ、クルジャ、ボグ

4) [Sultan 2006 : 143] では、アバク・ケレイ (Ka. Abaq Kerey) を、ケレイ・タイパ (Ka. Kerey taypa) の一つのルウ (Ka. rw) と説明し、[Sultan 2006 : 161] では、ケレイを中ジュズ集団に含まれるタイパと説明する。また、アバク・ケレイはジャンテケイ (Ka. Jäntekey) やジャディク (Ka. Jädik) など12の下位集団より構成されており、たとえばジャディクを、ケレイ・タイパの一つのルウ、と説明する [Sultan 2006 : 157]。これらの説明から、Sultanは「ケレイ・タイパ>アバク・ケレイ・ルウ>ジャディク・ルウ」という階層関係を念頭に置いているものと推測される。本稿では、これを「ケレイ部族>アバク・ケレイ集団>ジャディク氏族」と訳出しておく。

5) [『新疆哈薩克族遷徙史』編写組1993 : 41] や [『哈薩克族簡史』編写組2008 : 393] には、1770年にジェメネイ (Ka. Jemeney ; Ch. 吉木乃) とホブグサイル (Mo. Qobuysayiri) へケレイ部族が移動したとする。これが [Sultan & Zulikafili 2010] の記す、ジャンベクの移動と関係ある事柄か否かは不明である。

ド、エレーンハヴィルガに至る範囲に居住するようになった。ジュンガルの滅亡後の 1761 年（乾隆 26）にホヴド参贊大臣が置かれ、現在のモンゴル国オヴス、ホヴド、バヤンウルギーの各アイマグはその管下に入った。1864 年（同治 3）、露清間で中俄勘分西北界約記が結ばれて、一帯に広く居住し自由に往来していたカザフ人たちの牧地にも国境が設定され、「ロシアのカザフ」、「中国のカザフ」というカテゴリーができ上がり、アルタイ、タルバガタイ、天山のカザフ人は清朝に属した。カザフ人たちは 18 世紀中期にアルタイ北麓のホヴドの地に移動し始め、そこで安定した生活が可能であったためアルタイ南麓から多くのカザフ人が移動してきた結果、19 世紀の末には、アバク・ケレイ集団の 12 氏族のうちのジャンテケイ、ジャディク（Ka. Jädik）、シェルウシ（Ka. Şerwşi）、カラカス（Ka. Qaraqas）、モルク（Ka. Molqı）、シュバライグル（Ka. Şubarayğır）から大勢がホヴドの地に移動してきた。このように 1860 年代に「モンゴルのカザフ人」という概念理解ができあがった、としている [Sultan & Zulikafili 2010 : 29-30]。

本稿でも、バヤンウルギー・アイマグを含むモンゴル国西部の諸アイマグに居住しているテュルク系マイノリティーであるカザフ人を、モンゴル・カザフ人と称することにする。現在のモンゴル・カザフ人は、手元にある 2010 年の統計では、全国で 101,526 人、モンゴル国全人口の 3.9% を占め、2,168,141 人（全人口の 82.4%）を占めるハルハ人に次ぐ国内第 2 位の民族である。カザフ人が最も多く住むのはバヤンウルギー・アイマグで、全カザフ人の 75.6%（76,754 人）が住む。次いでホヴド（Mo. Qobdu ; HMo. Hovd）・アイマグで 8.9%（9,036 人）が居住しており、モンゴル国西部地域には全カザフ人の 84.8%（86,094 人）が居住している。またカザフ人と接して居住するドウルヴド人は全国で 72,403 人（全人口の 2.8%）、オリアンハイ人は 26,654 人（全人口の 1.0%）、トゥヴァ人は 5,169 人（全人口の 0.2%）、ザハチン（Mo. Jaqačin ; HMo. Zahchin）人は 32,845 人（全人口の 1.2%）である [Mongol Ulsyn Ündesnii Statistikiin Horoo 2011 : 54, 56-57]。

3. 調査した公文書資料

筆者がモンゴル国立中央公文書館で閲覧調査できたのは以下のフォンドに収められる公文書であった。フォンド名のキリル文字は全てラテン文字に改めた。

M-160, D-1: Dörvödiin baruun garyn Sain zayaat aimgiin chuulgan
dargyn jasaa

M-161, D-1: Altai Urianhain sul ambany tamgyn jasaa

M-162, D-1: Dörvödiin züün garyn Tögs hölög dalai hany hoshuu

M-163, D-1: Altai Urianhai züün garyn meeren zangiin hoshuu

M-164, D-1: Altai Urianhain züün garyn бүгдийн дэргын жасаа

M-165, D-1: Tagna Urianhain бүгдийн дэргын жасаа

M-176, D-1: Altai Urianhain baruun garyn бүгдийн дэргын хөшүү

M-205, D-1: Myangad negen khoshuu

時間が足りず、調査が未了のままのフォンドは次の通りである。

M-204, D-1: Hövsgöl nuurny Urianhai hoshuug zahiragch бүгдийн
darga

M-2, D-1: Uliastain manj janjny gazar

M-3, D-1, D-2: Uliastain jasaadyn mongol janjny gazar

M-4, D-1, D-2: Uliastai dahi TüsHEET han aimgiin jasaa

M-5, D-1, D-2: Uliastai dahi Setsen han aimgiin jasaa

M-6, D-1: Uliastai dahi Zasagt han aimgiin jasaa

M-7, D-1: Uliastai dahi Sain noyon han aimgiin jasaa

M-8, D-1: Hovd hotyn Halhyn jasaa

閲覧調査を終えた公文書のうち、本稿で取り上げるのは 1838 年（道光 18）から 1910 年（宣統 2）の間にかかる文書である。上にも記したように、カザフ人のアルタイ山脈への移動が 18 世紀中盤からというモンゴル側の見方と、本稿では、清代のアルタイからホヴドにわたるカザフ人とオリアンハイ人との共生関係を示唆する 1838 年から 1910 年間の文書を扱うことに鑑み、以下の考察は、すでにカザフ人の一部

がアルタイ山脈を越えてホヴドに移動しており、先住者との社会的関係を結んでいたことを前提として進めることとする。これ以前にかかる歴史的前提はおおむね、佐口、野田、小沼ら専門家の先行研究〔佐口 1986：375-435；野田 2011：45-81, 85-118, 149-179, 183-256；小沼 2014：157-211, 213-269〕に委ねたい。

4. 文書史料に見えるアルタイ、ホヴドにおけるカザフ人とその他の民族との共生関係

次に、アルタイとホヴド地域におけるカザフ人と先来の住民、とくにオリアンハイ人との共生の様態に関係する文書 5 件を選んで、その訳を示しつつ、共生関係を素描してみたい。

なお、筆者は清代のモンゴル語公文書にまだ精通しておらず、以下の訳には誤訳があったり、より適切な訳語を当てるべき部分が見つかることと思う。識者のご叱正を乞う次第である。

モンゴル語テキストのラテン字転写に用いた { } は行間からの挿入語句を示す。文書中に散見される現代正書法とは異なる綴りは見たと通りに転写し、いちいち修正しなかった。和訳に用いた【 】は補訳、下線を付した (?) は語意不詳の箇所である。モンゴル語テキストと和訳は紙幅の都合で適宜省略した箇所があるので、(略) で表示した。

4-1. アルタイ・オリアンハイ左翼へのカザフ人の流入

道光 18 年 (1838) 12 月 28 日のアルタイ・オリアンハイ左翼散秩大臣ダルマアザルの文書 [M163-1-4:2-5] には、アルタイ・オリアンハイの地に隠れ住んでいるカザフ人をすべて境界の外に放逐することに関する記述がある。

(略) *odu sayin noyan vang tūsimed čerig ner-i abču tan-u uriyangqai-yin nutuγ-un dotur-a niγuγu sayuγsan qasaγ nar-i neyiteber kiγaγar-un γadan-a kögen γaγaγsan-u tulada . egüni sula amban darmaaγara nar-tu tusiyan yabuγulju . ulamγilan öber öberün qariyatu {qosiyun-u} meyiren*

janggi ükeri da nar-tu čindalan tusiyaǰu keb-iyer urida ayiladqaju toytaǰaysan qarayul-un ǰaǰar-a olan čerig-i nemeǰü ǰarǰayad olan qarayul-dur sayulǰaju čindalan sergeyileǰü sakiyultuǰai . ĵiči buu nigen qasay-i nutuǰ-tur oruǰu qalyan üldegeǰü niǰuǰu nutuǰlayulugtun . (略) kerbe keb-iyer urida yosuǰar kereg bolǰaqu ügei qasay narun durabar nutuǰ-un dotur-a eǰelen nutuǰlayulǰu čuǰlarayuluǰsan anu masi olan-dur kürgeǰü . kögeǰü čidaqu ügei kemen (略)

(略) 現在サイン・ノヨン、王、官吏が兵を率いて、あなたのオリアンハイの牧地の中に隠れ住んだカザフ人たちをまとめて境外に追い出すため、これを【アルタイ・オリアンハイ左翼】散秩大臣ダルマアザルらに遣わし送り、伝えてそれぞれ自分の属下の旗の副都統、総管たちに厳格に遣わし、そのままかつて決まったカ倫の地に兵を増やし出して、多くのカ倫に居らせて厳格に警戒し守備させよ。また一人のカザフ人も匿い残し、隠れて牧地に居らせてはならない。(略) もしそのまま以前のように事とせず、カザフ人たちの気ままに牧地中に占め牧地に居らせ集合させた者が大変多くに至って放逐できないと言い、(略)

道光 18 年はイジャガトの移動が起こった年であり、清は流入したカザフ人を放逐する方針を堅持していた時期であった。この文書でもカザフ人の放逐を厳に命じている。ここではさらに、それまでカザフ人たちに好き勝手に土地を占拠させ牧畜させてきた結果、多くのカザフ人を抱え込んでしまい、もはや放逐が難しくなったことがわかる。「一人のカザフ人も匿い残し、隠れて牧地に居らせてはならない」とあるところから、現場では、流入してくるカザフ人を匿って牧地に留めさせていたと推測される。

4-2. アルタイ・オリアンハイ人によるカザフ人殺害の嫌疑

アルタイ・オリアンハイ左右翼の者によるタルバガタイ所属カザフ人殺害事件にかかる問題が、光緒 17 年 (1891) 7 月 24 日の文書 [M163-

1-9 : 2-8] に報じられている。

(略) tarbayatai-yin qariyatu qasaγ-un da mami-yin kelekü anu . badarayultu törü-yin jiryuduγar on jiryuγan sarayin dotur-a man-u qasaγ-un qoyar kümün yambar uçir-i medegdekü ügei jiligsen tegüni ükeri da idamjab-yin qosiyun-u janggi jamba-yin sumun-u qün basakü sula amban erkešonu-yin qosiyun-u janggi masibatu-yin sumun-u ulamji qüča janggi abuuči-yin sumun-u duusumbu en_e dörben kümün man{-u} jiligsen qoyar qasaγ-un ami-yi qokirayulba kemen gereči temdeg ügei öberün sanayan-u durabar kücü γarγaju yaraban kelemüi kemen iregsen-ü tula ükeri da idamjab bi eyin kü uçir-i medekü tüsimed bügüdeger-i quriyan abču asayubasu en_e kereg bolbasu badarayultu törü-yin doluduγar on naiman sarayin qayuča-du aγsan sula amban batumangnai-yin bayiqu čaytu genedte mön tarbayatai-yin qariyatu qasaγ-un janggi öskamba jayuyad siqam čerig kümün-i dayayulju tuy bariju sula amban-u lama küriyen-ü γajar-a irejü eyin kü dörben kümün man-u qoyar qasaγ-un ami qouralaba kemen kelegesen-dür aγsan sula amban batumangnai tarbayatai-yin qasaγ-i yerüngkeyilen jakiruγsan ükeri da jurtubai qoyar qamtu neylejü en_e dörben kümün-i bayičayabasu kelegesen gereči ügei üjekü temdeg ügei qoyar qasaγ-un kereg kemekü üge yerü γoyumi boluγsan-u tula . qasaγ-un janggi öskamba dayičing ulus-un dotur-a gem ügei bui atal_a tuy bariju čereg dayayulun dayičilan yabuju yosu busu kemeged qasaγ janggi öskamba-yi qasaγ-i yerüngkeyilen jakirugsan da jurtubai emegeltei morin-iyar torγuju jayun tasiγur jančiju nigente sidkegsen bil_e kemen (略)

(略) タルバガタイの属下のカザフの頭目マミ⁶⁾の言うことは、光緒6年6月のうちに、我がカザフの二人がどのような理由かを知

6) Ka. Māmi [Sultan 2006 : 12, 19]。1912年、袁世凱政府によって貝子に封じられた人物として馬米の名が見えている [『哈薩克族簡史』編寫組2008 : 207]。

らずに死んだ。それを【アルタイ・オリアンハイ右翼】総管イダムジャヴの旗の章京ジャムバのソムのホン、また散秩大臣エルヘシヨノの旗の章京マシバトのソムのオラムジ、ホツ、章京アヴォーチのソムのドーソムポー、この4人が我が死んだ二人のカザフの命を損なわせたと行って、証人も証拠もなく、自分の思いの好き勝手に力を出して Y'RP'N (?) 言う、と行って来たので、総管イダムジャヴ私は、このような理由を知る官吏皆を集め取って尋ねると、この事件は、光緒7年8月の昔(下旬?)に、かつての散秩大臣バトマグナイのいた時、突然同じタルバガタイの属下のカザフの章京ウスカムバ(?)がおよそ100名の兵を連れて軍旗を持って参贊大臣のラマ・フレーの地に来て、このような4人が我が2人のカザフ人の命を害した、と行って話したところ、かつての参贊大臣バトマグナイはタルバガタイのカザフを総て管轄する総管ジュルトゥバイ⁷⁾とともに会同して、この4人を調べると、話した証人が居らず、見るべき証拠もない2人のカザフの事件という言葉は、そもそも軽率なものになったため、カザフの総管ウスカムバ(?)が大清国の内で差し支えないにもかかわらず、旗を搦んで兵を随えて率いて行くのは非道と言って、カザフの総管ウスカムバ(?)をカザフを総て管轄する総管ジュルトゥバイは鞍付きの馬で賠償させ100回鞭打ちして、すでに処理したのであった、と行って、(略)

オリアンハイ人であると思われるアルタイ・オリアンハイ右翼のホンヤアルタイ・オリアンハイ左翼のオラムジら4人が、光緒6年(1880)6月にタルバガタイ管下のカザフ人2名を殺したことに對して、タルバガタイ管下のカザフの章京ウスカムバ(?)が光緒7年8月に兵100を率いて抗議したが、証人も証拠もないまま、このような行動に出たため、ウスカムバ(?)は罰せられた。この件をカザフの総管マミが蒸し返したことを伝えている。タルバガタイ管下に入り住牧するよう

7) Ka. Jurtbay [Sultan 2006 : 12, 19]。

になったカザフ人が、隣接するアルタイ・オリアンハイの者に殺された疑いをカザフ側の頭目が払拭できず、ともすればカザフ側が武力に訴えてオリアンハイ側に抗議の実力行使に出るような社会状況を知ることができよう⁸⁾。

4-3. ロシア所属のカザフ人の無断越境幫助

光緒30(1904)年3月25日の文書 [M160-1-3 : 74a-75b] には、ドゥルヴド右翼のタイジであるバルジンがロシア所属のカザフ人を故意に引き入れ越境させ、その牧地で遊牧させて、そこから税と称して銀や獣皮を得ていた利益を得ていたことが記されている。

(略) badarayultu törü-yin qorin doluduyar on-dur qay nuur qarayul-i tus jakirqu tayiji-yin quubi-dur sayuysan aruysan jalan baljin man-u nutuy čičayatu kemekü yažartur sanayan-u durabar yadayadu ulus . orus-un qariyatu šarayaltai-yin qasuy-i kili yatalyan nutuyłayulju süi-yin mönggü arban doluyan lang ünegen-ü arisu nige nar-i abuyusan anuyi uday_a daray_a nayirilal-iyar nekebesü terekü mönggü-yi ögküčü bayituyai qarin šarayaltai-yin qasay mönggü öggügsen jüil oytu ügei bayital_a teyin kü qudal küügejü güjirel-iyer nekekü anu . yayun aji gekü jerge-ber ayibarilan ese öggügsen-dür nidunun jil-dü soyuy qarayul nar-i jakirqu tusalayči damirin-dur medegülbesü tusiyaqu anu uul mönggü {öggügsen} kemekü qasuy aq_a . amiri narača lablan asaıuyad sidkebesü jokimui kemegsen-dür qay nuur qarayul-un janggi kengše . man-u qosiyun-u čayday_a-u janggi bayar nar-bar qasuy-un aq_a . amiri narača asaıuluyšan-dur tedenerün qoyisi keler_e iregsen anu . mönggü arban

8) 光緒18年(1892)12月18日の日付の有る文書 [M161-1-1] には、タルバガタイの借地内にあったハバ川方面から、カザフの盜賊がアルタイ・オリアンハイの地に闖入し、その盜賊はオリアンハイ人との争いを引き起こしていたことが記されている。本文書は十分な調査を終えることができなかったため、ここでは参考情報のみを注として示すにとどめておく。この文書においては、カザフ人移住民たちが、オリアンハイ人の居住するアルタイ地域社会において盜賊行為を働く存在であったことが記されている。

doluγan lang . ünege nige ner-i tayiji baljin öberiyen abuyad . bidanar-i nutuγlayuluγsan čing ünem kemen kelebe kemegsen-dü (略)

(略) 光緒 27 年にハク湖カ倫を管轄するタイジの議事に座した委署(?) 参領バルジンが、我が牧地のチャツガトと言う地に、勝手気ままに外国であるロシア所属のシャラガルタイのカザフ人に境界を渡らせ牧畜させて、税の銀 17 両、狐の皮 1 枚などを取っていたことを幾度も注意深く(?) 追跡すると、その銀を与えることはおろか、かえてシャラガルタイのカザフ人が銀を与えた類は決して無いのに、そのような虚偽を間断なく話し(?) 濡れ衣によって追及するとは何のためかなど、みだりに言を弄して与えなかったので、昨年、ソゴグカ倫等を管轄する管旗章京ダミランに知らせたところ、言い付けるに、その銀を与えたというカザフのアカ、アミリらより問いただして処理すべきであると言った時、ハク湖カ倫の章京ケンシェ(?)、我が旗のカ倫を巡察する章京バヤルらがかザフのアカ、アミリらに尋ねたところ、彼らが返事を言うために来たことには、銀 17 両、狐 1 などをタイジ・バルジンが自ら取って、我々を牧畜させたのは誠に真実だと話した、と言ったところ、(略)

ロシア帰属のカザフ人に密越境・密牧畜させて利を得なければならぬほどにドウルヴドのタイジが困窮していたのか、その他の理由があったのか、それに応じるロシア所属のカザフ人側にはどのような事情があったのかなどは文書からは読み取れないが、上の 4-1 で見た [M163-1-4 : 2-5] では、オリアンハイの側がかザフの越境牧民を匿うことが記されていたので、オリアンハイやドウルヴドの側にカザフ牧民から利益を得ようとする動機が存在したと思われる。

4-4. オリアンハイ人とカザフ人の連合盗賊団

光緒 30 (1904) 年 4 月 26 日のドウルヴド右翼の文書 [M160-1-3 : 28a-b] では、泥棒バヤルを処罰した件が伝えられている。

(略) edüge tokiyaysan-i dayaju uriyangqai-yin qamtu neyilejü mön

qosiyun-u bayar-i bayičayan sigüjü egündür busu eteged uriyangqai
qasay nar-luγ_a qoličaldun yeke nasun-u temege mori tabu-yi qulγuysan
anu yal_a büküi tula (略)

(略) いま、一致したことに従って、オリアンハイと合わさって、
同じその旗のバヤルを調べ訊問し、これにおいてだけでなく、オリ
アンハイ人がカザフ人たちと混じり合って、5歳を超えたラクダ、馬
5頭を盗んだことは有罪なので、(略)

バヤルは、オリアンハイならびにカザフの民と混じり合って駱駝と馬を
盗んだとある。カザフ人とオリアンハイ人が混住する地域には、民族の
違いを越えて共同で窃盗を働き利益を共有しようとした例があったこと
を示している。

4-5. カザフ人スケルバイの牧地占拠

筆者が調査した中でもっとも紀年の新しい文書は、末尾に宣統2年
(1910) 7月19日の日付のある [M163-1-17: 3-25] である。

(略) önggeregsen jil yisün sarayin dotur-a . qasay-un bi aqalayči
sukerbai-yin γajarača qasay mingγ_a-yi jaruju . ükeri da vačirjab
nadur iligejü medegülügen anu sukerbai bi tan-u nutuy qobdu čayan
{youl}-un belčir-dür tür sayuju . ebidčitei em_e-yi emčilegülküi-
ber mongγul ger-i bariju . γayča ger čögeken edür sayuy_a kemen
γuyun kelegülügen-dür uriyangqai qasay-un eb nayirimdal-i boduju .
čögeken edür sayutugai kemegsen bil_e . mön kü sarayin qaγučin-dur
qobdu čayan youl-un bayiqu_l_a čögeken qaryai modu-yi nigemösün
uytulaju mön qobdu čayan youl-un belčiger . öčükten nigen toqai
γajar-i qasay sukerbai öberün durabar türümgeyilen ejelejü nigen
vang modun bayising barijukui . tuqayidur man-u γajarača janggi
batudelger . bošiqu daruγ_a narun kedün kümün-i uday_a daray_a
-bar tomilan jaruju . qasay-un aqalayči sukerbai-dur iligejü . terekü
qobdu čayan youl-un belčiger-tür bayising bariju bolqu ügei uçiri

kelegüljü . kereber bayising bariqu bolbasu egünçe öber öberün ayili duratai ƳaƳar-tur barituyai kemebesü . qasay sukerbai oytu yayuman-u toyuqu ügei qarin qariyuu kelegesen anu bičü bayituyai altai ayula-yin ƳaƳar-a . Ƴarliy-iyar Ƴaruyusan sayid-un dergede man-u qasay-un güng Ƴingsayan nar bayising bariju bui kemen eldebiyer ayibirlan kelejü oytu ülü keregsegsen-ü tulada . kinabasu sukerbai-yin bayising bariju sayuyusan ƳaƳar bolbasu man-u qosiyun-u lama küriyen ba nutuy-un arad-un dotur-a dangču masi öger_e büged . uriyangqai qasay nar nigen qamtu qoličan sayuqul_a qoyar nutuy-un qoƳurumdu aliba qulayai qudal-un kereg tengdekü bolbau kemen . ayul bolƳumjilaqu uçirtu öger_e ƳaƳar-a bayising barituyai kemegezen bil_e . egündür öčüken ükeri da vačirƳab bi küčürken türümgeylejü qasay sukerbai-yi bayising bariju bolqu ügei kemen tusiyaysan Ƴil egenegte ügei urida badarayultu {törü}-yin qorin qoyaduƳar on-dur mön qasay-un aqalayči sukerbai-yin nutuy-un sayambai-yin köbegün qara güjei ner man-u qosiyun-u temürlic-ün ami-yi süidkejü ükügülügzen nigen kereg-ün uçir-a . qobdu qubi-yin sayid-un ƳaƳarača Ƴarayaysan tüsimel ner temürlic-ün ami-yi süidkejü ükügülügzen kereg-i sidkejü daƳusqayad egünçe qoyisi en_e qobdu čayan Ƴoul-un belčiger-tür mongƳul qasay narun nigen qamtu qoličan sayuju bolqu ügei kemen tusiyaysan-i dangsan-a temdeglegsen kereg bülüge . inayisi tusiyaysan-i daƳaju ebisü belčiger ayuuƳim ulayan qusum kemekü ƳaƳar-a ebül-ün čaytu enekü qasay nar-i nutuyayulun sayulayaysan bil_e . en_e qobdu čayan Ƴoul-un belčir bolbasu Ƴil büri namur ebül qabur . Ƴurban čaytu büküi qosiyun-u olan arad bayiqul_a bay_a say_a ebisü-yi qadaju abuyad čögeken mal-iyen aduyulju erkim čiqul_a alban-i morin noqai metü čirmayin Ƴidküjü Ƴalayamjilan dangnaju . ami teƳigejü sayuyusan {öčüken} nigen toqai ƳaƳar bil_e . iƳayurun olan üy_e-dür nutuyulan sayuyusan boyda ežen-ü šangnan nutuyayulugzen nutuy mayad mön egündür qasay sukerbai egüüride

en_e jüi busu-bar asuru küçürken ayaşilaju türimgei terslenggüi jang
 ɣaryaju nigen qamtu ejelen sayuju bolbasu öçüken qosiyun-u tüsimed
 bida douradu olan arad-i barimtalán jakirču boɣda ejen-ü tügemel
 kisig-i kürtéküi-dür neng yeke jobayari-yi eberlegsen-ü tulada . büküi
 qosiyun-u olan arad nar čögeken mal-ıyan aduyulaqu ba . amin jiyuqu-
 dur üneker berke . jıcı simtei sayın ɣajar-i ejelen bulıyaysan-ıyar baraqu
 ügei ulam-ıyar ketüreju ɣurban sar_a-ača ekilen jiryuyan sar_a kürtel_e
 sukerbai-yin nutuy-un qasay nar gegegen edür degeremden abuysan ba .
 edür söni qulayun abuysan aduyı . üker . temege bügüde neyileju tabın
 ilegüü . buu nige mönggü nige jayun yeren lang bulɣ_a ɣurba ünüge
 doluy_a bürin keregseltei emegel tabı bolumı . egünče urıda olan jil-
 dür uday_a daray_a bulıyan qulayuydasan mal-un kereg olan buı . enekü
 man-u qosiyun-u alba jalıamjılaysan čöken arad-un ami tejjegsen mal-
 ıyan abayulıysan uçır-tu . olan ɣasıyun jobulang-i küličeju čıdaqı ügei
 edüge darı . kündü kereg degdegülküi-dür kürču buı anu . nidü üjetel_e
 ılarqai darı qarıyatı qasay-un küçürken türümgeyilekü bayıdal_a
 -ı üjebesü . mongɣul mungqay arad amur dubduyui ami jiyuqu-yi
 sanaqu ügei . ɣadayadu olan ɣajar-a sarnın tarqaju yuyıringčılan keriküi-
 dür čayağa keče-yi kičiyenggüyileküi-ben önggeregsen büged öçüken
 tüsimel bida yayakin čilyudan surɣabaču man-u barimtalán jakırqu-yi
 keregsebečüber küliyen dayaqu ügei urıyangqai-yin yadayıu yeke bay_a
 mingyan ilegüü kümün ami-yi qayırılaqu ügei-yin tuyıl-dur kürüysen
 anu . čing ünén yerü čimalakılan medegülkü ɣajar ügei-yin tulada .
 qasay sukerbai-yin degeremden qulayuyısan temege morı . mönggün-ü
 jerge jüilün toɣ_a bičig-ün segül-dür jıysayan bičijü olbası . qarıyatı
 sula amban tan-a ergün medegülju yuyıqu anu ulamjılan jokıqu ɣajar-a
 ergün medegülju jöriy-ıyar bariysan bayısing-i ebdegülju olan jüil-ün
 degeremden abuysan ba . qulayuydayulıysan mal ɣayum_a-yi qoyısi
 egegülün olıju olan mongɣul mayı arad-i nutuy-un dotur-a orsın

sayulyaǰu ači aqu-dur amur dubduyai bolıyaqu-yi mörgün yuyuy_a
kemen ergün medegülün irejüki . (略)

(略) 去年の9月中に、カザフのビィ・アハラクチであるスケルバイの所からカザフ人 1000 人を遣わし、副都統オチルジャヴ私に送り知らせたことは、スケルバイ私はあなたの牧地であるホヴドのツァガン川の合流点で一時的に住して、病気の妻を治療させるためモンゴル・ゲルを立てて、たった一つのゲル、わずかな日にち住もうと言って乞い告げさせたところ、オリアンハイ人とカザフ人の和睦と謙讓を思い、わずかな日にち住するように、と言ったのだった。同じその月の下旬(?)、ホヴドのツァガン川にいたところ、数少ない落葉松の木を一つ残らず伐採し、同じホヴドのツァガン川の牧草地の小さな河流の屈曲地(?)をカザフ人スケルバイが自分勝手に侵し占めて、一つの王の木製家屋を建てた。時に、我が所から章京バトデルゲル、領催の長たち数名を次々に任命して派遣し、カザフのアハラクチであるスケルバイに送り、そのようなホヴドのツァガン川の草地に家屋を建ててはならない理由を告げさせ、もし家屋を建てるのならば、これから自分のどの好きな所に建てるように、と言うと、カザフ人スケルバイはものごとを全く考慮せず、かえって返答するには、私だけではなく、アルタイ山の地には欽差大臣の傍らで我がカザフのゲン・ジンサガン⁹⁾たちが家屋を建てている、と言って種々様々に言を弄し、全く受け入れないので、詳しく調べると、スケルバイの家屋を建てて住んだ所は我が旗のラマ・フレーと牧地の民の真ん中で、ほんとうに甚だ別であり、オリアンハイ人とカザフ人たちが一緒に入り混じって住むならば、二つの牧地の間で何か盗みや嘘にかかる事件が発生するだろうかと恐れ謹しむので、別の所に家屋を建てるように、と言ったのだった。これにおいて、副都統オチルジャヴ私力が力を用い威力を恃んでカザフ人スケルバイに、家屋を建ててはならない、と指示した類は一向に無く、かつて光緒 22 年に、その

9) Ka. Jeñisxan [Sultan 2006 : 12]。

カザフのアハラグチ・スケルバイの牧地のサヤンバイの息子であるカラ、ギュジェイたちが我が旗のトゥムルグの命を損ない死なせた一つの事件の件においてホヴド参贊大臣の所から出させた官員たちがトゥムルグの命を損ない死なせた事件を処理して終わったこのこと以来、このホヴドのツァガン川の草地でモンゴル人とカザフ人がひとつ一緒に混じり合って住んではならないと指示したことを檔子に記録したのだった。以来、指示したことに従い、草地が広大なオラーン・ホサムという所で冬の時にこのようなカザフ人たちを牧畜させ居らせたのだった。このホヴドのツァガン川の合流点は、毎年秋・冬・春の三つの時に、あらゆる旗の民がいれば、すこしばかり草を刈り取って、少数の家畜を放牧し、尊く重要な公役を馬や犬のように地道に励み継承して専らに務めて生活し住んだ、小さな河流の屈曲地(?)であった。もともと何代にもわたって牧畜を営み住んだ、聖主の賞賜にあずかり牧畜を営ませてもらっている牧地に間違いはない。これにおいて、カザフ人スケルバイが永久にこの不条理さで大いに力を逞しく振る舞って敵対的な性質を出して、一緒に【牧地を】占めて居るならば、小さな旗の官員である我々は、賤しい多くの民を把握して管理し、聖主の広大な恩恵を頂戴するに当たり、大変に大きな心配を抱いたので、すべての旗の多くの民は少ない家畜を放牧することと、貧しい生活をするのは本当に困難である。さらに、豊かな良い土地を占め奪っただけではなく、ますます度を越し、3月から6月までスケルバイの牧地のカザフ人たちは、白日に略奪した、昼夜盗み取った馬、牛、ラクダは合わせて50頭余り、銃1丁、銀190両、ミンク3、狐7、全用具付きの鞍5組である。これより以前、多年にわたり、次から次へ奪い盗まれた家畜の事件が多くある。このような家畜の旗の公租を継承したわずかな民の命を養った家畜が取られたため、たくさんの艱難辛苦に耐えることができず、今はただちに重大な事態を引き起こすに至っていることは目で見ると明らか(?)で、ただちに属下のカザフ人の力を逞しくし威力を恃

む状態を見れば、モンゴルの暗愚な民が安寧に静謐に何とか暮らすことを思わずに、外のたくさんの土地に分散し物乞いして放浪することにおいて、禁令を気をつけることを越しており、小さな官員である我々はどのように導き(?)教えても我が把握して管理することを用いても受け入れ従わない。オリアンハイの貧しい大小 1000 余りの人命を愛おしまない極みに至ったことは、誠実にそもそも不足に感じることを知らせる所が無いため、カザフ人スケルバイの奪い盗んだラクダ、馬、銀など類の数を書の末尾に列挙して書き、でき得れば、属下の散秩大臣様に呈し知らせて乞うことは、伝達するのが適当な所に呈し知らせて、勝手に建てた家屋を壊し、多種の奪い取ったそして盗まれた家畜と物品を返させ与えて多くの暗愚な悪民を牧地の中に居らせて恩恵のあることにおいて安寧で静謐になすことを伏して乞おうと言って呈し知らせて来たのだった。(略)

この一文書に見えるオリアンハイ右翼総管オチルジャヴの一方的な言い分のみで、事態の全体像を把握することや、カザフ人の移動・移住とホヴド定着が文書に訴えられている方法でなされることが常態化していたと理解することは慎むべきであろう。一方、この文書に見えているカザフ側のスケルバイ¹⁰⁾が先住のオリアンハイ人との共生において、上記のような緊張関係を作り出していた事実を伝える点で興味深い。

この文書では、オチルジャヴがカザフのビー・アハラクチ・スケルバイによる数々の迷惑行為を訴えている。スケルバイは 1000 人ものカザフ人を送り込んで、オチルジャヴの牧地のあったホヴドのツァガン川に、妻の治療を理由に短期間の滞在を申し入れた。「オリアンハイ人とカザフ人の和睦と謙譲を思」ったオチルジャヴはこれを受け入れ、スケルバイたちは住牧し始めた。ところがひと月も出て行かずに、木材を過度に伐採

10) Ka. Sükirbay Jılqışılı [Sultan 2006 : 179 ; Sultan & Zulikafili 2010 : 238]。清朝崩壊期の混乱の中にあつて最終的にボグド・ハーン政権に投じてカザフ人のモンゴル西部定着に一定の役割を果たした人物である [Sultan & Zulikafili 2010 : 238] とか、元来は中華民国寄りの姿勢を取ったためにモンゴル国内での評価が分かれている人物であるという [Zardyhan 2003 : 53-54]。

し、河川屈曲部の牧地を占拠し、木造家屋の建造に及んだ。これを注意したところ、全く意に介さず、カザフのゲンのジンスガンも家屋を建てているのだから自分も建てる、など言い張って受け入れなかった。スケルバイが家屋を建てたところはオリアンハイの寺と牧地の真ん中に位置しているため、オチルジャヴは両者混住に起因する紛争を恐れ、別の場所に家屋を建てるよう提案したのであった。このように両者を分離させることは、光緒 22 年（1896）に起きたカザフ人によるオリアンハイ人殺人事件の結果、ツァガーン川の草地での混住と牧畜を認めず、カザフ人は冬季にオラーン・ホサムに居らせるようになって以来のことであった。そもそもツァガーン川の牧地はオリアンハイ右旗の旗民が夏以外の季節に小規模に牧畜する所であったが、ここへスケルバイが移動してきて不条理な住牧に及んだのであり、オチルジャヴは旗民の更なる貧困化を懸念している。スケルバイらはこの牧地の占拠だけにとどまらず、さらに家畜・銃・銀子・獣皮・鞍一式の略奪・強盗に及んだこと、この種のカザフ人による家畜強盗は今回の事件以前から起こってもいたという。

5. おわりに

モンゴル国所在の、カザフ人関連記録を有する清代のホヴド・アルタイ地域のモンゴル語公文書はここに紹介した以外にも存在するが、紙幅の都合から、共生関係に関連する内容を持つ文書だけを選んで分析した¹¹⁾。

本稿で設定した目的の第一は、カザフ人の歴史研究にモンゴル所在の清朝期公文書が用いられていない理由を発見することであった。文書調査を完全に終了していない今の時点で確定的なことは言えないことを前提にして、以下を示しておく。アルタイ・オリアンハイ左右翼、ドウルヴド左右翼、タグナ・オリアンハイ、ミャンガドの地方文書の中に、カザフ

11) ここで分析しなかったカザフ人に関する文書には、ホヴドとタルバガタイの間の懸案として知られる、ハバ川一帯を含む借地問題に関する件を記した光緒16年（1890）12月26日の文書【M163-1-6：1-13】があるが、この文書の内容は『清実録』光緒17年3月庚寅に記録があり、これに基づく張 & 叶1989や張 & 王2002といった研究もある。

関連文書は数量が少なく断片的である。カザフという名称が確認される文書は道光18年(1838)以降に限られているが、清露境界間でのカザフ人の帰属に決定的影響を与えた中俄勘分西北界約記が結ばれた1864年(同治3)以前にかかる文書がごく少数であるが存在している。

本稿の目的の第二は、カザフ人と他民族との共生関係の様態である。道光18年(1838)の時点で、オリアンハイの地に闖入したカザフ人は数が多く、もはやこれを放逐することが困難になっていた。現場では、越境してくるカザフ人を匿って牧畜させないよう指示が出ていたところから、カザフ人を呼び込んで受け入れるオリアンハイ人が存在したと考えられる。オリアンハイ人の牧地においてカザフ人は他民族との共生関係を結んでいたのである。公文書に伝えられる共生関係とは、必ずしも友好的で協調的な関係ではなく、光緒6年(1880)には、タルバガタイ所属のカザフ人が隣接するオリアンハイ人に殺されたとの疑いが沸き上がり、翌年には、これを怒ったと思われるカザフの頭目が軍事的示威行為に及ぶほどの不穏な緊張関係に陥った。この件を10年後の光緒17年(1891)にタルバガタイ所属のカザフ人頭目が蒸し返すほど、カザフ側には容易に解消できない不信感が蓄積されていた。光緒27年(1901)には、ロシア所属のカザフ人をドゥルヴドのタイジが引き入れてひそかに牧畜させて、そのカザフ人から銀や獣皮を得ていた事実から、カザフ牧民の越境は清境内のドゥルヴド側とオリアンハイ側が不正な利益を目当てに引き起こす場合もあった。このような一種の連携関係は、オリアンハイ人とカザフ人の加わる強盗団の例にも見て取れる。モンゴル・カザフ人とは、おおむね、オリアンハイ人らが先住する地に入り込んできたカザフ人である。彼らの定着過程の全容はまだ明らかになっていないが、騒乱を避けると称してカザフ人はオリアンハイ人とひとつの牧地に混ぜ置かれなかったこと、しかしカザフ人はオリアンハイ人がすでに牧畜を営む良好な牧地に暫時的口実を作って立ち入ったこと、こうした立ち入りをオリアンハイ側は受け入れたこと、カザフ側は他のカザフ牧民の定住例を既成事実としてそこに居座ったこと、カザフの側がオリアンハイから家畜や銀などを略奪しオリアンハ

イ牧民が貧困化したことが確認される。

一見すると、生活の足がかりをホヴド地域に得ようとする後発のカザフ側が攻撃的に活動していたようにも見える。しかし、カザフ人のホヴド地域への流入を支援して利益を得る者がいたことや、カザフ人とオリアンハイ人が共同で盗みを働くなど、家畜や牧地という生活基盤をめぐる集団間対立の一方で、共同融和の局面も見えていた。新勢力の流入による地域再編は多民族混住の形で進行したが、その結果としての共生様態を「対立と和合」という極端な形で特徴付けてよいものかはいささか疑問である。文書に記録されるのは何らかの問題群であると考えるとき、共生の様態として、この種の記録には見えていない平時の状態をも射程に入れる必要があるだろうと思う。

最後に、本稿にかかる資料調査は、モンゴル国立教育大学のL・アルタンザヤ教授と共同で実施し、資料の複製取得には東北大学東北アジア研究センターの堀内香里氏に大変お世話になった。深甚の謝意を表する次第である。

参考文献

- 『哈薩克族簡史』編写組
 2008 『哈薩克族簡史』北京：民族出版社
 Mongol Ulsyn Ündesnii Statistikiin Horoo.
- 2011 *Hün Am, Oron Suutsny 2010 Ony Ulsyn Toollogo : Negdsen Ür Dün.* Ulaanbaatar. (http://ubstat.mn/Upload/Reports/khaos-nii_2010_onii_ulsiin_toollogiin_negdsen_dun_niislel_2011-11.pdf [2015年3月31日最終アクセス])
- Noda Jin & Onuma Takahiro
 2010 *A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty.* (TIAS central Eurasian research series, special issue 1.) Tokyo : Department of Islamic Area Studies, Center for

Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and
Sociology, the University of Tokyo

野田仁

2011 『露清帝国とカザフ=ハン国』 東京：東京大学出版会

小沼孝博

2014 『清と中央アジア草原』 東京：東京大学出版会

佐口透

1986 『新疆民族史研究』 東京：吉川弘文館

Sultan Taukein & Zulikafili Mauletiin

2010 *Bayan-ölgii Aimgiin Nevterhii Toli*. Ulaanbaatar : Soyombo
Printing HHK

Sultan Tawkeyuli

2006 *Ata Tanim*. Wlaanbaatar : [s.n.]

『新疆哈薩克族遷徙史』 編写組

1993 『新疆哈薩克族遷徙史』 烏魯木齊：新疆大学出版社

Zardyhan Kinayatyn

2003 *Nulimstai Jilüüdiin Namtar*. Ulaanbaatar : Ti End Yü Pringting
HHK

張榮 & 王希隆

2002 「清末科塔借地之爭述論」 『中国辺疆史地研究』 12-1 : 24-32

張永江 & 叶雪冬

1989 「清季科布多塔城地区借地問題」 『昭烏達蒙族師範專科學校
學報』 1989-3 : 20-24